

## 指昭博先生の新しい出発に寄せて

著者	並河 葉子
雑誌名	神戸外大論叢
巻	74
ページ	19-21
発行年	2021-11-20
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1085/00002418/">http://id.nii.ac.jp/1085/00002418/</a>

## 指昭博先生の新しい出発に寄せて

並河葉子

指昭博先生は1995年に神戸市外国語大学に着任されて以来、25年にわたって教育、研究、大学運営において多大な貢献をしてくださった。

2016年からの4年間は学長として、加速度的に運営の厳しさが増していった大学を率いてくださった。先生の絶妙なバランス感覚と視野の広さに大きな信頼があったからこそ、私たちは安心して大学で業務にあたることができたのだと、あらためて感謝する次第である。

その視野の広さとバランス感覚は、先生の研究にも存分に発揮されている。というより、もしかしたら研究活動によってそれが培われた、あるいは、磨きがかかったのかもしれないと思う。

指先生の研究のフィールドは、宗教改革期のイングランド史を中心としたイギリス史である。宗教改革改革期のイングランド史研究は、複雑な教義の解釈をめぐる宗教史と、国際関係の変転を反映して目まぐるしくいれかわる権力者の政治的な闘争に焦点を当てた政治史に大きく分かれており、イギリス内外の研究者はそのどちらかに軸足を置いて研究を進めてきた。

難解な宗教論争は、キリスト教そのものに距離のある日本人にとってなじみが薄く、その意義が理解できないことも多い。しかしながら、指先生は、教義の解釈をめぐる論争が生まれた背後にあった、キーパーソンたちの人間関係や心の動きにも思いを巡らせて検証を進め、それが政治の動きとどのように関係したのかを鮮明に浮かび上がせる。もちろん、教義そのものについての考え方をないがしろにしているわけではないが、理念で語られがちな教義論争のコンテクストを現実の政治状況のなかに置きなおし、関係する人びとがなぜそのように考えたのか、それぞれの当事者たちの置かれた立場から分析することで、辛気臭い教義論争を人間味のある語りに見事に变化させて見せてくれる。

また、この時期についての研究の多くは、社会における一部のエリート層の動向の分析が主となっており、市井に暮らす人びとにとって宗教改革とは

何であったのかという点に研究者の眼差しが向けられることはあまりない。残された史料の制約もあり、ふつうの人びとがどのように暮らし、何を考えていたのか、何に喜びを見出し、やるせなさを感じていたのかを知るのはことのほか難しいという事情ももちろん大きく影響しているのはいうまでもない。しかしながら、指先生の眼差しはそうしたふつうの人びとの暮らしや思いにも向けられている。図像や建築物など、文書以外を検証対象として扱う見事な手腕には毎回感嘆させられるが、そこには持ち前のセンスだけではなく、それぞれを透徹した目で見つめてポイントを読み解く豊富な知識がある。たとえば教会という空間に身を置いた当時の人たちがどんな感覚を覚えたのだろうか。身の毛もよだつような図像を目にした人が何を感じたのだろうか、描き手は何を伝えたかったのだろうか。

ご業績一覧には、プロの歴史家ならではの、物語としての歴史の迫力や面白さを誰もが体感できる作品（研究業績）が並んでいる。

穏やかな語りには、お人柄がにじむ。英雄ではなく敗者とされた人たち、あるいは名前も残っていないふつうの人の諦念やため息が、まるですぐそこから聞こえてくるような筆致がとても魅力的だ。そして、あきらめだけではない人びとのしたたかさや逞しさも見つめる視線は、もしかしたら日々の大学運営にも生かされていたのかもしれない。

500年近く前のイギリスという私たちから遠い世界を見つめ、イギリス社会の中にいる人たちが当たり前と思って見過ごしてしまうようなことをあらためて問いなおし、その時代ならではの事象を拾い上げて、それが実は人間社会の普遍的なものであることを提示する。これこそ、イギリス人にはできないイギリス史だろう。そして、日本において「外国学」をすることの意義はまさしくそこにある。

文字通り外大の看板として活躍してこられた指先生が定年までまだ少し残して退任されるのはとても残念なだけでなく、なんとも心細いことこの上ない。とはいえ、これから新しい研究に取り組むために力を残してのご退任、まさしく新しい出発である。これから積み重ねていかれる新しい研究成果を拝見するのを心から楽しみにしている。

指先生、外大での教育、研究、そして運営業務に多大なるご尽力ありがとうございました。心よりの感謝を申し上げますと存じます。

通常、送る言葉は、こうしてこれまでの感謝で締めくくるものだろうと思

う。けれども、指先生にはこれまでの研究活動をさらに発展させて、研究者として私たちをこれからもけん引してほしいという、厚かましくも切なるお願いを最後にさせていただく不躰をお許しいただきたい。最後までお願いばかりで申し訳ないと思いつつ、それでもやはり、これからもどうぞよろしくお願いいたします。

